

## 繭から作ってみよう 岡崎市緑丘保育園（愛知県岡崎市）

毎年全クラスで飼育、観察を重ねている蚕ではあるが、その積み重ねのなかで、年長児に対してはよりその成長や変化を、驚き、疑問、喜びなどの気持ちの深まりにつなげていけないものだろうか考えた。昨年までは、まとめて育てる方法をとったのだが、今年度は一人に一匹ずつ世話をする方法をとることによって、昨年度までの姿との違いや、子どもの様々な気づきを保育者が受け止め、そこからひろがりを持たせ、次につなげられるよう保育を展開した。 [実践事例集 Vol. 2 の 45 ページ参照]

### 繭から作ってみよう

当園では、毎年子どもたちが育てた繭でコサージュを作り卒園児にプレゼントしている。今年は、繭イコールコサージュというイメージの強い子ども達に対して、実際の糸作りや布を織る体験を計画した。導入として絵本「ペレのあたらしいふく」（ペスコフ著）を読み聞かせる。子ども達は、絵本の中でその絵本の主人公に同化し、主人公と一緒に成長して又現実の世界にもどってくる。絵本「ペレのあたらしいふく」のストーリーは小さくなった洋服を新調するため、自分の飼っている羊から糸を紡ぎ、染めて、織り、洋服を仕立てるまでを主人公（ペレ）が周りの大人たちと様々に関わりながら出来上がっていく過程が温かく描かれている。



ねらい：「ペレのあたらしいふく」の絵本を通して繭が糸となり様々な形となっていく過程を追体験し、表現したり、考えたり、創り出していく楽しさを味わう。  
方法：事前に「ペレのあたらしいふく」を繰り返し読み、使用する道具も絵本に出来るだけ近い物を準備し糸を紡ぐ作業についての理解を深め、興味、関心を持たせる。

### （本当に糸が出るのかな）

子：糸巻きの道具をみると「これ糸車でしょ？」「糸をまくんでしょ？」と、その状況をすぐに理解した。しかし繭から糸が出る様子を見ると「これ何？」と聞いてくる。丸い形のもの再び糸として戻ってきたことは、子どもたちにとっては理解しにくい現象であった。

またコロコロと動きながら繭が糸になってくるところを見て、「繭まだ生きてるの？」と受け止めた子もいる。

保育士：「繭はあったかいお風呂に入ると蚕のはいった糸がはがれてくるんだよ」と繭を煮た湯や繭からでてきた糸に実際に触れさせた。

子：「蚕の口から出てたのとおんなじみたい」「くもの巣みたいだ」「飴の糸みたい」と子ども達がそれぞれに感じたことを表現し始めた。また順番に糸車を回すことを経験させたことにより、「蚕の糸って細いけど切れないね」「くもの巣はすぐ切れちゃうよ」糸の美しさ、丈夫さなどを実際に糸に触れることで感触を実感していった。糸は2クラスの年長児20人が交代で巻き取り2時間ほどかかった。

子：「長い！長い！1300メートルって長いね」（図鑑から蚕は1300メートルの糸をはいて繭を作るという知識を得ていた）

保育士：「1300メートルって保育園からどこまでいけると思う？」

子：「？ ？ ？」

子どもたちにとって長さの感覚は捉え難いようであったため、遠足コースを1500メートルほどの場所を選び、歩きながら伝える。

### （最後のさなぎ）

子どもが育てた蚕を煮て糸を出し切った最後のさなぎまで見せるのは残酷なのではないかと検討したが、人間が便利に生活できている中には様々な犠牲もあるのだということの間接的にも感じ取ってもらいたいと願い最後の姿まで見せることにした。

子：子ども達は、さなぎから糸を取り出す作業の中で、「蚕って繭を外から作るの？中から作るの？」糸を取り出していくうちに繭は透けてくるが、繭の大きさが原型（出来立ての繭）と変わらないのを見て子どもたちは疑問に思ったようである。

子：「中から外だよ、それでだんだん繭を大きくしていくんだよ。」

子：「違うよ、外から中だと思っ。最初から中だと早く苦しくなって外に糸を出せなくなっちゃう。」子：「外から段々糸を出して、体が小さくなって、苦しくなって茶色になって死んじゃうんだよ」子：「蚕さん頑張ったんだね」とさなぎを触ったりまだ少し出てくる糸を手で巻いたりしていた。

### <考察>

子どもたちの言葉の中にもあるように、初めて繭から糸が巻き取られた状態を見たときに「これ何？」という疑問を持った。事前に糸を取ることも、方法も伝えていったのだが全く予想のつかない現象であったのだと思われる。実際に見て触れて時間をかけて経験していくことで繭から糸への変化を受け止めていけたようである。最後のさなぎが見えた時には、繭を作る過程に視点がいき蚕に自分を同化させ仮説をたてたり「蚕さん頑張ったね」など励ましや承認の思いも生まれてきた。蚕が長い糸をずっとはき続け段々小さくなって茶色になって繭の中で死んでしまったという仮説は、正しくはないが保育士は「頑張ったね。」の気持ちが、やがて便利で豊かな生活のために犠牲になっているものや事柄に対して感謝する気持ちが育ってくれることを願いあえて正解とは出会わせる事はしなかった。

### （糸を染める）

絵本のストーリー展開どおりに染め粉で糸を染め洗って乾かす作業を子ども達と一緒に行う。取り出した糸は、染めた段階で手ぐすのような、かなりごわついた手触りとなり本来味わえなかった絹の感触とは程遠いものとなってしまった。糸を取り出すことは容易であったが、そこからのよりをかける作業が非常に困難であり一本の糸として作り上げることは保育者の試行錯誤の連続であった。



### (わーきれい、できたよ)

子どもたちの糸を巻き取っていく作業の結果として、感触や光沢が生まれてこないだろうかと考え、木枠に糸を巻き取って行灯作りに挑戦した。木枠にピンピンに張られた生糸は、美しい光沢があり手触りもよく期待通りの作品に仕上がって当園の玄関ホールに展示した。

子：どの子どもも皆立ち止まって行灯を眺め何度も触っては、「わー、つるつる」と感触を楽しんでいた。製作に携わった子ども達は母親に送迎時に行灯を見せて「私たちが作ったんだよ。こうやって（巻く動きをやってみせる）何回も回してできたんだよ」

保護者：「きれいだねー。みんなで作ったの？すごい！お母さんはじめて見た」と驚いていた。

子：「きれいだね」子ども達は美しく仕上がった作品作りに参加できたことが嬉しく、自慢気であり、やり遂げた満足感に浸った。



行灯作りに挑戦

糸の取り出しの過程では、「良い糸だね」「僕たちのはかつらやさんに売れそうだね」「つるつるだね」など、主に感触の違いを言葉にして感じていったようである。また自分の身の回りのものは全てお店屋さんから買ってくるという思いが強かったが、「この糸は上手に出来たね」「お店に売れそうだね」「この糸は何で染めたの？」「色がなければ染めればいいんじゃない」など子どもたちの中で自分たちで作って使える物作りの発想と方法も生まれてきた。行灯作りでは、園内全ての子どもたちが入れ替わり立ち代り行灯に触れ感触を楽しんでいた。生糸の丈夫さを改めて実感教材としても適性であったと思われる。

### (さあ 織ってみよう)

当園では、毎年年長児が機織りを経験している。昨年の年長児の機織りの姿に憧れを持ち「大きくなったら自分も」といったいわば成長の証のような活動である。ペレ（絵本の主人公）の成長に合わせて、子ども達もまた一緒に成長する実感を活動を通して味わせたいと考え、取り出した糸を使っての機織りの体験を取り入れた。

子：「私たちもやれるの？」

子：機織り機を目にした子どもたちは、「これ知ってる、お姉さんたちがやってたのでしょ？」「私たちもやれるの？やってみよう」と、ロ々に大きな期待と喜びを表現した。

一連の過程を常に絵本にそって体験してきた子どもたちは、縦糸を生糸、横糸を毛糸にして織り始め、織りあがったものをどの様に活用しようかと考え始めていた。またこの頃から、生糸のことを「ペレ」と呼ぶようになりペレに結びつけた発想をし始めていた。

子：「これ、できると布になるんでしょ？」「ちょっと小さいからペレの服にはならないんじゃない？」

子：「ちびペレがあれば、それに着せたら？」「靴下ならできる？」「枕カバーならできる？」

子どもが順番に織っていく中で、段々イメージも膨らんできた。

保育士：子どもたちの発想やイメージを実現させてあげたいと考えて、小さい人形に子ども達の織りあげたものとタマネギで染めた布を使って「あたらしいふく」を作って人形に着せてちびペレを作り子ども達の思いに添った。



お見事！やっ  
できあがり！

### (ペレのお家も作ろう)

子：「ペレの洋服できたね」「あと、靴下と手袋があればいいな」「ペレにお家作ってあげよう。」と積み木でペレの家やベッド、テーブルなどをつくり、他の仲間たちとも仲良く遊んでいる情景を作り上げて友達同士でイメージを共有して遊ぶ姿が見られた。



#### <考察>

機織りを通して「私たちにもついにその時が来たんだ」年長児としての自覚、誇り、喜びなどを感じてとても意欲的に活動に取り組めた。縦割りの生活が基盤となっている当園では常に憧れのモデルとして年長児が存在してきたことが、子どもたちの意欲につながったのだと思われる。時に糸が絡まったり、やり直しの部分もあったけれども、皆で協力をし最後まで根気よく作り上げることも出来た。「ペレの洋服を作りたい。」そんな発想や気持ちも出てきた。保育士がその発想を実現する援助をしたことにより、作ったもので遊ぶ、大切に扱う意識も芽生え、イメージを共有して楽しく遊ぶ年長児の姿も見られた。

### みどころ

生糸を染め、織り上げるという取り組みは、幼児にはイメージを持ちにくい活動です。しかし、絵本という教材を通して、具体的に目的や見通しをもつことができ、子どもたちは最後まで主体的に取り組むことができました。また、絵本を用いたことで、染色や織り上げるなどという情報を得るだけでなく、主人公や登場人物の気持ちを感じ、ストーリーの展開を楽しむことができたので、模倣遊びや表現遊びの楽しさも味わいながら喜んで活動を展開する姿が引き出されました。同時に、絵本そのものも大事な心に残る一冊になったことが分かります。